

## 第二期 ハンサム・ウーマン

### 山本覚馬について

最初に山本覚馬についてまとめておく。覚馬(良晴)は文政十一年一月十一日(新暦一八二八年二月二十五日)、会津藩上士の山本家の長男として誕生した。母は一人娘の佐久で、父は近所の永岡繁之助(婿養子)である。覚馬は幼少の頃から賢く、五歳の頃には唐詩選を諳んじていた。その一方、相当腕白だったようだ。九歳で藩校(日新館)に入り、槍術をはじめとする武術の鍛錬に励んだ。もちろん父が砲術師範だったことで、鉄砲などの扱いにも慣れていた。

成績優秀だったので、嘉永三年(一八五〇年)選ばれて江戸に出て、佐久間象三の塾で短期間西洋砲術を学んでいる。嘉永六年(一八五三年)に再び江戸へ留学しているのも、その折黒船を見ているかもしれない。さらに大木塾で蘭学を学び、洋式砲術について深く研究した。同門には勝海舟、吉田松陰、武田斐三郎<sup>あや</sup>などの著名人がいた。

安政三年(一八五六年)に会津に戻った覚馬は、日新館の教授となり蘭学所を開設する。その教授として、江戸の塾で知り合った川崎正(尚)之助を招いた。この尚之助こそは、後に八重の夫となる人物である。覚馬は妻としてうらを娶り、一女みねが誕生している。

文久二年(一八六二年)、京都守護職を引き受けた主君容保に従い、覚馬も京都に赴いた。その頃の京都は騒乱の地と化していたが、覚馬はそこで洋学所を開設し、他藩にも門戸を開いて教授した。

元治元年（一八六四年）七月、禁門の変（蛤御門の変）が勃発した折、会津藩は薩摩藩と協力して対立する長州藩を京外へ放逐した。砲兵隊を指揮して勲功をあげた覚馬だが、それ以来目を患い視力が低下していった。その頃、会津藩のために仕えていたのが大垣屋大澤清八や会津小鉄こと上坂仙吉である。

慶応二年九月、覚馬は中沢帯刀を伴って長崎を訪れている。一番の目的は銃の買い付けであるが、もう一つ、オランダ医師ボードインに目の治療をしてもらうためだった。しかしボードインからは回復の見込みなしと診断されている。銃の買い付けは上手くいっており、その折に交わしたカール・レーマンとの契約書も残っている。

慶應四年（一八六八年）一月三日、鳥羽伏見の戦いから戊辰戦争が勃発する。錦の御旗を掲げた官軍に対し、会津藩は朝敵（賊軍）となり、江戸へ敗走した。目を患っていた覚馬は捕えられ薩摩藩二本松邸に幽閉されるが、その五月に建白書「管見」を野澤鷄一に口述筆記させている。その内容は新国家のあるべき姿を具現したもので、先見性に富んだものだった。この書を島津公に上進したことによって覚馬は釈放され、明治三年には京都府顧問（嘱託）として京都の復興に携わることになる。

ただし現存している明治五年の「官員進退禄」には、

山本覚馬

当府出仕申付候事

壬申正月廿八日 京都府

右同人

当府出仕中十等官員之取扱申付候事

但四人口に月給三十円差遣事

京都府

河原町三条上ル式丁目下丸屋町

年寄

其町内山本覚馬儀当府え出仕十等官員之取扱申付

候間兼而相達置候戸籍規則之通可取斗候事

壬申正月廿八日

京都府

と記されている。幽閉中、目はほとんど見えなくなった。そればかりか歩くことも困難となったので、覚馬の身の回りの世話は若い小田時栄がしていた。いつしか二人の間には娘久栄が誕生している。

盲目になったためか、覚馬が詠じた和歌や漢詩は伝わっていない。かろうじて『山本覚馬伝』には、戊辰戦争中に捕われた時、

渡るとも加茂の川水清ければまたきかげさす心すずしき

という歌を詠じたことが記されている。また松本健一氏『山本覚馬』には、

自為国家遇艱難 　みずから国家の為に艱難にあう

従容処分意還安 　従容たる処分、意また安んず

白咲亦有締袍贈 　白咲また締袍（綿入れ）の贈りものあり

当日熟為范叔寒 　当日たれぞ范叔（晋の士鞅）の寒とならん

という覚馬の漢詩が紹介されている。これは薩摩藩邸に捕われていた折のものとのことである。「白咲」とは白

梅のことであるが、新島襄の寒梅の漢詩とも符合している。

一方、会津では鶴ヶ城に籠城して応戦するも、一ヵ月後に敗戦・開城となった。八重たち一家は塩川村へ避難し、その後米沢の内藤新一郎方へ一家で疎開していた。そこへ死んだと思っていた兄からの手紙が届いたのである。覚馬が京都で生活していることを知り、八重たちは京都へ移住することを決めた。ただし覚馬の妻うらは、京都に覚馬の愛人がいることを知ってか、しかも娘が誕生していることに我慢できなかつたのか、離縁して現地に留まることになった。そこで八重は覚馬の娘のみねを連れて京都へ向かった。

明治六年（一八七三年）三月、第二回京都博覧会開催に合せて、覚馬は外国人向けに英文のガイドブック（京都案内記）を丹羽圭介に作らせている。その活字を拾ったのは八重だった。その年、小野組転籍をめぐる訴訟に敗れて東京で拘束されていた長谷信篤ながたかのぶあつや榎村正直を救出するため、覚馬は八重を連れて上京した。

明治八年（一八七五年）、覚馬はアメリカから帰国した新島襄と運命的に出会い、英学校設立に全面的に協力することになる。覚馬の協力によって、同志社英学校はその半年後の十一月二十九日に開校することができた。「同志社」という名称は、覚馬が考案・命名したものとされている。なお学校の敷地は旧薩摩藩邸（元は相国寺の敷地？）であるが、京都府の所有になっていたので覚馬から格安で提供された。

明治九年（一八七六年）正月三日、洗礼を受けたばかりの八重と襄が結婚し、覚馬と襄は義兄弟となる。襄との接近、同志社の開校などにより、覚馬は榎村正直からの信頼を失い、明治十年には京都府顧問を辞している。その書類には、

山本覚馬

御用無之当府出仕差免候事

明治十年十二月廿七日 京都府

と記されていた。覚馬は京都府より同志社を選んだのである。

京都復興の功労者であった覚馬は、明治十二年に府議会が開設されると、早速府議員に立候補・当選し、しかも初代府議会議長に選出された。その折、慶應義塾を卒業した丹羽圭介が書記となって覚馬を手伝っている。皮肉なことに覚馬は、これまで協力してきた榎村知事と議会で対立することになったのである。

翌明治十三年に議長を辞した覚馬は、明治十八年には二代目京都商工会議所会頭に就任している。ほぼ同時期に洗礼を受けてクリスチャンになっているが、それは襄の外遊の間同志社英学校の校長代理を務めることになったからかもしれない。

明治二十三年一月に襄が没した後、覚馬は同志社臨時総長に就任し、襄亡き同志社を支えている。明治二十五年（一八九二年）十二月二十八日、惜しまれつつ覚馬は死去した。享年六十五であった。葬儀は同志社チャペルで行われ、新島襄の眠る若王子墓地の一角に葬られている。急速に近代化していった京都における覚馬の活躍（二代記）を、誰かドラマに仕立ててくれないだろうか。「八重の桜」だけで終らせるのは惜しい気がする。

### 山本覚馬の妹

一八七一年（明治四年）十月、兄覚馬を頼って一家で京都に移住した八重は、ここで川崎姓から山本姓に戻った。盲目かつ足の不自由な兄に、鶴ヶ城籠城の武勇談を語って聞かせたことだろう。『改訂増補山本覚馬傳』には、八重が入浴した時、毎晩目を覚ますと「おい八重それからどうだった、話してくれ」と籠城の話聞いていた。行くこともできず故国の破滅を非常に悲しんでいたのである。

（176頁）

と記されている。これが本当なら、この時から八重の懐古談は醸成されつつあったことになる。

この転地が、八重の第二の人生を切り開くことになった。会津も京都も戦災で焼け野原であった。会津で一度死んだも同然の八重は、京都で一度死んだも同然の兄を助けることで、かつての力が再び漲<sup>みなぎ</sup>ってきたようだ。八重は不自由な兄の世話をしながら、兄の勧めもあって、早速英語や聖書を学んでいる。敗戦による空虚な精神状態が続いていた八重だが、転地によって新しい人生が始まったのである。

京都は復興の真っ最中であった。一八七二年（明治五年）四月、八重は兄に勧められて、新設された新英学校及女紅場の出頭女十二名の一人となり、京都府から給金をもらっている。これは兄の進言によって開校された公立の学校だった。一般的な女紅場は、貧しい女子に読み書きそろばんや裁縫・手芸・養蚕を教える学校であるが、この女紅場は華族や士族の子女を対象に英語なども教授している。晩年の八重の回想には、当時の生徒が鉄漿<sup>おほくろ</sup>を塗り懐剣を差し、その美麗さは牡丹の花盛りのようだったと述べられている（『鴨沂会雑誌』五〇・一九二二年）。

八重は過去に閉じこもることなく、この当時では珍しい積極的に働くことのできる女だった（現代のキャリアウーマン）。後のものだが、八重の辞令が京都府立総合資料館に保存されている。職名が「出頭女」から「権舎長兼機織教導試補」に変更されているので、その後役職がきまったのか、あるいは昇格したのであろう。

山本やゑ

女紅場権舎長兼機織教導試補申付候事

明治八年二月八日 京都府

「試補」とは「見習い」の意味である。八重は教導試補として、礼法や機織の指導にあたったようだ。江戸時代生まれなので学校こそ出ていないが、会津で機織をやっていた八重にとっては朝飯前の仕事であった。また

「舎長」とは寮母のようなものだから、八重は住み込みで働いたと思われる。あるいは覚馬が後妻の時栄（時恵とも）との気まずい同居を避けようと画策したのかもしれない。その時の舎長（八重の上司）は会津藩出身の芦沢鳴尾だった。男女を問わず、覚馬は会津藩の人々を積極的に登用していたのである。覚馬を頼って会津から京都にやって来た人も少なくあるまい。

### 英文京都案内記

明治六年（一八七三年）のこと、京都では三月十三日から六月十日までの九十日間、第二回京都博覧会が開催された。これは幕末に廃れた京都の復興（外国への製品売り込み）が目的である。そのため覚馬は、ドイツ（レーマン兄弟）から取り寄せた最新式の活字印刷機を使って、外国人観光客用に英語の観光ガイドブック「英文京都案内記」（銅版画入小冊子）を作らせている。これは日本人による初の英語で書かれたガイドブックである。その経緯については、

英文の案内記の原稿は先生の娘（のちに横井時雄氏夫人）の婿養子にするつもりで山本家にいた喜三郎という人と丹羽氏（圭介）とが、美濃紙に筆で書いたもので、活字は先生の娘（本当は妹）八重子（のちに新島襄先生夫人）が拾った。解版も八重子と丹羽氏の妹とがそのことにあたった。印刷された案内記は四十八頁で洛中洛外の絵入りである。当時は内務省でなく文部省の認可を経て発行したので、著者は山本覚馬出版社者は丹羽圭介である。

（『改訂増補山本覚馬傳』99頁）

と記されている。印刷機の活字（アルファベット）を拾ったり解版したのは、京都に来てすぐに英語を学んでいた八重と丹羽の妹英<sup>ひな</sup>だった。その八重のことを「恐らく日本最初の英文植字工であった」（同100頁）としている。